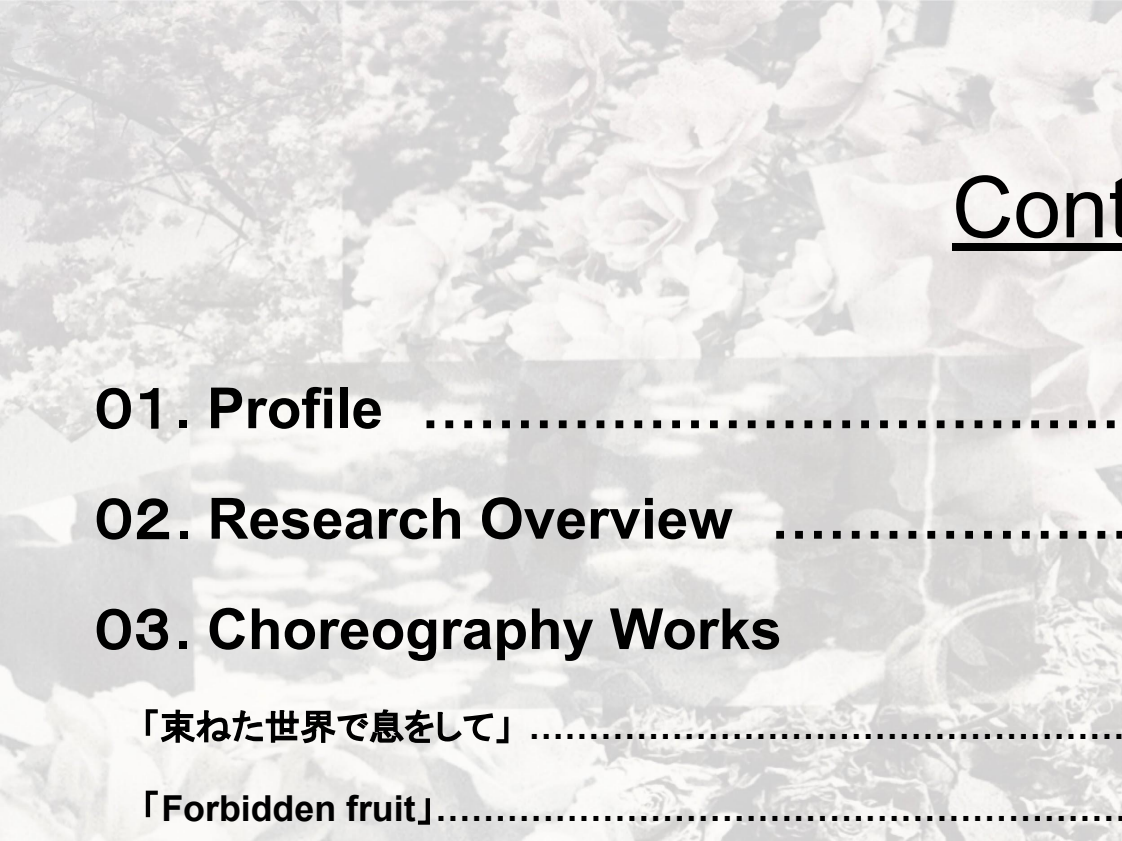


Portfolio

松本 梨緒





Contents

01. Profile	1
--------------------------	----------

02. Research Overview	2
------------------------------------	----------

03. Choreography Works

「束ねた世界で息をして」	3
--------------------	---

「Forbidden fruit」.....	12
------------------------	----

「空に潰される。」	17
-----------------	----

「あの日の景色は。」	23
------------------	----

「春惜しむ」.....	28
-------------	----

「月に染まる」.....	33
--------------	----

「Reminiscence -慈雨-」.....	37
--------------------------	----

「妖艶の花」	41
--------------	----

Profile

Matsumoto Rio

松本 梨緒（ダンサー・振付家）

Instagram

https://www.instagram.com/kori0118?igsh=b3N3cTh3eWU1YXhy&utm_source=qr

2002年1月18日生まれ。

現在、日本大学大学院芸術学研究科舞台芸術専攻に在学中。

3歳よりクラシックバレエを始める。

座間全国舞踊コンクール第2位、東京アートブリッジバレエコンクール第5位。

17歳よりコンテンポラリーダンスを始め、田保知里、二見一幸に師事。
バレエコンクールIN横浜 コンテンポラリー部門第1位・特別賞、湘南バレエ・コンペティション コンテンポラリー部門 自由作品シニア部門第1位
・PARTS留学スカラシップ賞、埼玉全国舞踊コンクール モダンダンス1部 埼玉県舞踊協会奨励賞、秋田全国舞踊祭モダンダンスコンクール 入選、現代舞踊協会主催 選抜新人舞踊公演 出演。

ダンサーとして活動する一方で、“身体表現”を用いて自らの固定観念を壊した上で感情表現を見出し、別形態にすることで見える新たな景色から生まれる自身の新たな言語に遭遇することを目的として、振付作家として作品創作を行っている。

2024年11月に主催舞踊団体 Eine Kleineを立ち上げ、2025年9月に旗揚げ公演を上演予定。



Research Overview

「踊る」とは、単なる身体の動きではなく、動きの元となる感情を自身の身体を通じて記憶から呼び起こす行為であると考えます。それは自分自身を再発見する機会でもあり、自己探求のプロセスを含む。ダンサーは、自身の内なる感情や記憶を身体の動きとして表現し、その過程で新たな自分を発見し、観客に深い感情体験を提供することができる。従って、感情と身体の間を通じた表現が重要となる。

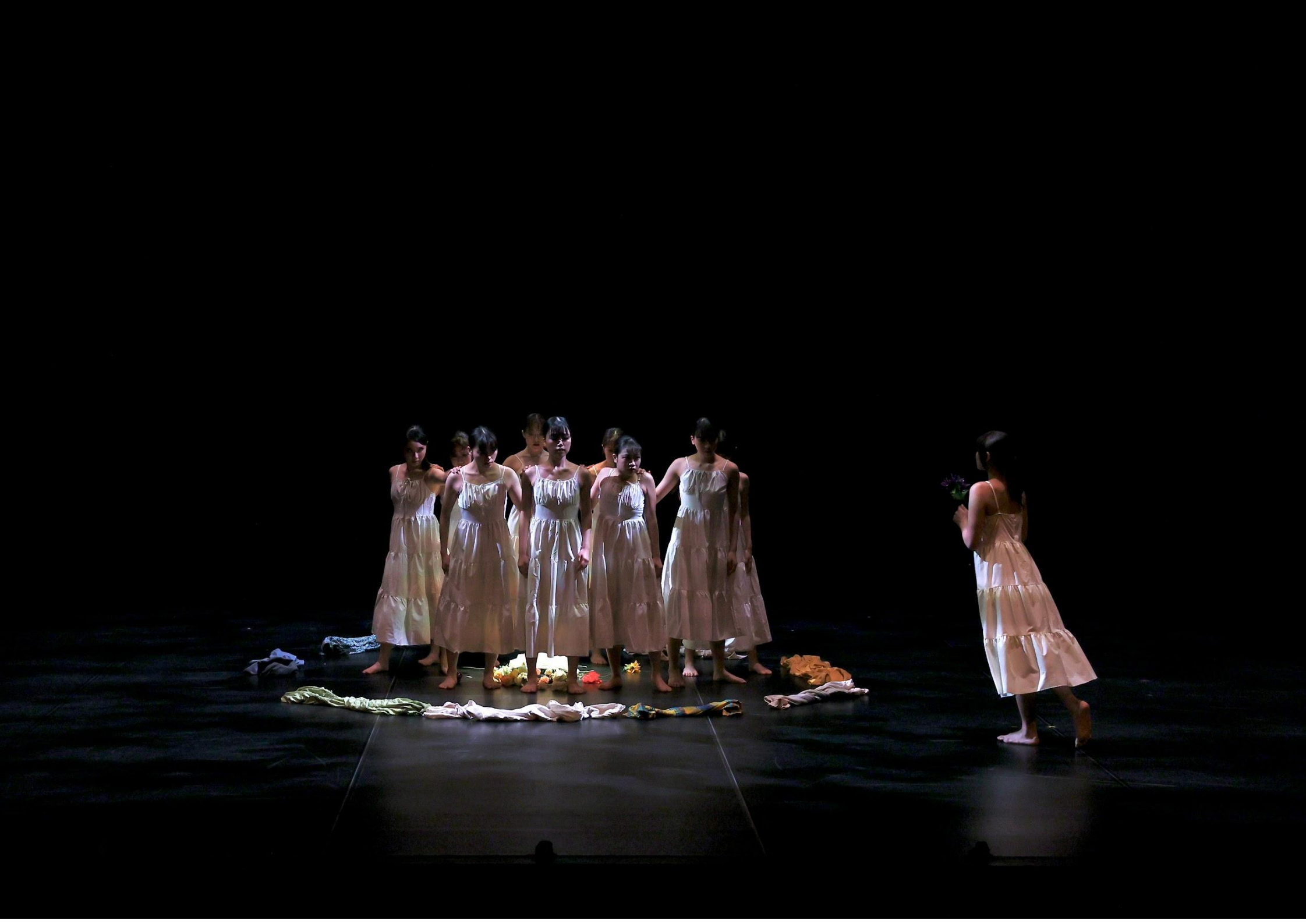
そして、現代で多く上演されている演劇的ダンスとはどのような有効性があるのかを探り、安易に演劇的要素を舞踊に入れることで身体がどう生かされるのか、身体と感情の対話が言葉によって曖昧になっていくことを探る。そして、本来の「踊る」という行為の意味を改めて見直していきたい。

以上から、「踊る」という行為での感情表現の新たなアプローチを実践的に探求し、感情と身体の間を通じた舞台芸術のさらなる発展を目指すものである。「踊る」という行為を通じて、自分自身を再発見し、観客と共に新たな感情表現体験を創り上げることを目指す。又、ダンサーによる感情表現の新たな表出に加え、観客との感情的なつながりを強化し、舞台芸術の革新を促進することにも繋がると考える。

「束ねた世界で息をして」

そんな世界を生きた。













「束ねた世界で息をして」

そんな世界を生きた。

ある村でのある儀式。

この美しさを装っている世界で息をする。

痛くて、脆くて、儚くて。

手を伸ばしても もう届かない 虚ろに立ち尽くした夜明け。

○上演時間
6分

○上演人数
10人

○使用楽曲

- ・青サギⅡ / 久石譲
- ・無垢 / Yuma Yamaguchi
- ・20220207 / 坂本龍一
- ・I'm Born Child (African Skies) / Ezio Bosso

Stages

・日本大学芸術学部演劇学科 令和5年度 卒業制作(洋舞)

「Now on Stage」

令和5年12月1(金)～2日(土) @ 日本大学芸術学部北棟 中ホール

<https://nichigei-engeki.com/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E8%8A%B8%E8%A1%93%E5%AD%A6%E9%83%A8%E6%BC%94%E5%8A%87%E5%AD%A6%E7%A7%91-%E4%BB%A4%E5%92%8C5%E5%B9%B4%E5%BA%A6-%E5%8D%92%E6%A5%AD%E5%88%B6%E4%BD%9C%EF%BC%88-2/>

[Movie <https://youtu.be/ApEEgUTkkT8?feature=shared>]

Work theme

過去→「学校」

- 自分の個性を押し潰されて考えや正しいことがまかり通らない世の中を知る時間
- 自分自身を騙して生きる
- 多数派が正義、「みんな違ってみんないい」って結局何
- 実際もっと広い世界はあるのに視野が狭くなって「ここしか居場所がない」と感じてしまう

↓ 感じた「醜さ」を現代に繋げる

現代→「多様性」

- 差別のない社会の実現、幸せの形は人それぞれ、自分に正直に生きよう…そう言えるのは本当の自分を明かしたところで排除されない人たち
- 「あなたが人と違っていても理解してあげる」と手を差し伸べるのは大体多数派の内側の人間
- 異性愛者が「私は差別しません」なんて簡単に言えるのは、差別される側ではないから

↓

「多様性」って使えばそれっぽくなる魔法の言葉ではない

学校から感じてきた負の側面、そして現代の多数派の人間が捉えている「多様性」が、まるで「宗教に洗脳された状態」のように感じた。実際に正しいことが何なのかわからない、声を出すことができない、出したとしてもターゲットとなり生贄状態になる。

そんな世界を美化させ、架空の世界を作る。

「ある村で行われる、白ワンピースの女性たちによる生贄探しの儀式」

固定観念化された世界に生きた人々を動かしたい。自らの手で固まった世界を壊し、声をあげる。

それにより解放された先には崩壊していく世界が見える。全てが崩れ切った先には美しい世界が広がっているだろう。

Creation theme

「醜いと感じた過去を、追憶した上で壊し、美しく浄化させること」

私たちは今まで生きていく中で、未来について常に考え、その未来に向かって生きてきた。しかし、ふと気づけば「過去」という時間軸が着実に伸びている。過去という存在は追憶という作業をしない限り、再会することはできない。そして、自分や他者の記憶、日常として捉えられている時間の多くが記録には残らずに、どんどん閉ざされ消えていってしまうもの。

「私はどのような過去を経て今の私が存在しているのか」

「この世界はこれからどこに行き着くのか」

そして、閉ざされていく記憶の中でも、「醜い」と感じた記憶、つまり自分の中で苦しさ、生きにくさ、疑問が生まれたものは、浄化しない限り醜さが消えることはない。さらに、この浄化されていない「醜い」と感じた過去の記憶は、現代で感じる息苦しさにもどこかで繋がってくるのではないだろうか——。

また、過去となった記憶というものはいまや固定観念のような塊となり、私たちはその塊を崩さないように息をしている。まるで花束にされた花のように。

しかし、その固定観念という私たちを縛る過去の記憶の塊を視覚的に自らの身体を使って実際に崩し破壊していくことができるとしたら、その破壊されたものの痕跡を見て何を感じるだろうか。抵抗や緊張、恐怖なのか、あるいは解放感や喜びなのか。また、固定観念にあふれている既成の世界自体を壊し、パラレルワールドのような「実際ではありえない仮の世界」を創り出した上でその空間に身体を解放したときに、そこで新たに現れる現実や真実はなにか。

その当時は現在であり今では過去となった「記憶」というものが完全に閉ざされていく前に呼び起こし、その中でも「醜さ」を持った記憶を浄化させるために、まるで固定観念化した過去の記憶の塊を自らの身体で破壊させ新たな仮の世界を創り出す。

実際に自らの皮膚で感じてきた記憶を持ち、身体が表現媒体という最も裸体な芸術である身体表現を用いて呼び起こしていく。

「Forbidden fruit」

一つの実が誘惑し続ける。

_____ ああ、この楽園から追放される。







「Forbidden fruit」

一つの実が誘惑し続ける。
_____ ああ、この楽園から追放される。

○上演時間
5 分

○上演人数
10 人

○使用楽曲

- ・Auroral/Steven Hess
- ・summer overture/Clint Mansell
- ・Rue des Cascades/Yann Tiersen
- ・グレタ・タウンベリ スピーチ音

Stages

・日本大学芸術学部演劇学科令和3年度 2年次総合実習 I B(洋舞)
「Modern Dance Performance～シンメトリー形式による創作～」-Knock-
令和3年11月26～27日 @日本大学芸術学部北棟中ホール

[Movie https://youtu.be/1D6B0w1_gzw]

Work theme

題材として、創世記の「Forbidden fruit」(＝禁断の実)を用いた。

今回作中で扱った「Forbidden fruit」の意味とは、それを手にすることができないこと、手にすべきではないこと、あるいは欲しいと思っても手にすることは禁じられていることを知ることにより、かえって魅力が増し、欲望の対象になるもののことである。

「失樂園」の作中では、禁断の実＝りんごを食べてはいけないと言われながらも、人間の元からあった“欲”というものに抗えず、イヴはヘビにそそのかされて禁断の実を口にしまい、アダムにも分け与えてしまう。その結果、アダムとイヴの無垢さは失われてしまい、裸を恥ずかしいと感じるようになってしまった。それを知った神はアダムとイヴを樂園から追放し、彼らは死すべき定め、生きることの苦しみを一生背負うこととなった。
「人間の中に元からある罪は“欲”である」「人間の欲から生まれた悲劇の始まり」

現代において「Forbidden fruit」と同様な存在として置かれている概念やモノはありふれており、人間達は原罪として“欲”を備え、都合のいいように生きる生き物であるため、「Forbidden fruit」となるものを食い漁っているように感じる。

自然破壊も同様である。プラスチックオーシャンにおいても“海にゴミは捨てない”と人間達が声を上げ、森林伐採においても“自然を大切に”と人間達が声を上げている。地球温暖化においても様々な技術が進歩する代償として燃料を必要とするため、二酸化炭素が減ることはない。実際はどうかと見渡すと、人間達が宣言したもののすべてが人間達の手によって破壊されているのである。

“欲”というものに正直に従ってしまうことにより「崩壊の道」へと進んでいってしまうことがある。

Work process

人間が“欲”という原罪の存在に気づき染まっていく様子がわかるよう、衣装は男女とも白をベースとしたものにした。そして、無垢で真っ白のように見えるが、実際は黒い影のような原罪が備わってしまっているということが視覚的にもわかるよう、白い衣装に黒い影が出るような照明プランを立てた。

また、タイトルでもある「Forbidden fruit」(＝禁断の実)は実際にリンゴの模型を使い、白い衣装に対して赤という、より惹きつけられるような“欲”が見えるようにした。

音響は、初めから終わりまで重めの音を用いて、かつ後半に向けて気持ちを掻き立てられるようなスピードにすることで、無垢な中でも不安などの人間らしい感情が見えるよう構成し、後半からはグレッタ・トゥンベリさんの温暖化についてのスピーチを音源に差し込むことにより、この人間の「欲」というものは現代の生きづらさへと繋がっていくということを感じ取れる一つの種として入れ込んだ。

「空に潰される。」

空白のような、何もない底抜けに青い空に祈ったが、
そこから逃れることはできなかった。







「空に潰される。」

空白のような、何もない底抜けに青い空に祈ったが、そこから逃れることはできなかった。

○上演時間

5 分

○上演人数

7人

○使用楽曲

・Cat & Mouse/坂本龍一、アルヴァ・ノト、ブライス・デスナー

Stages

・日本大学芸術学部演劇学科 令和4年度 3年次総合実習 II B(洋舞)

「Modern Dance Performance～ロンド・カノン形式による創作～」

令和4年10月8(土) @ 日本大学芸術学部北棟 中ホール

[Movie <https://youtu.be/nFah6zyQ-uo?feature=shared>]

Work theme

ふと、空を一人で見上げた。雲一つなく真っ青だった。

現代を生きている身として、過去に比べて様々なことが発達し生きやすくなったように見えた。実際にその場にいらなくても遠隔で顔を見ながら会話が出来る、紙に書いて渡さなくてもデジタル上に打ち込んで送信すれば会わなくても受け取れる、人間がいなくても機械に聞けば正確な答えが返ってくる。しかし、すべてに共通することは「温かさの消滅」である。確かにすべてコミュニケーションは成立している、そして効率的である。だが、その中で「温かさ」というもの、つまり人間同士の触れ合いは感じ取ることができない。

そのような世界で生きる私たちを囲む「空」という、逃れようにも逃れることのできない存在。「空」は、地球上でいくら発達した世界が広がっていても何もかわらない。ある意味残酷であり現実である。

過去と現在で同じ空の下にいる私たち、ここは本当に生きやすい世界なのだろうか。そう感じ、空を見上げると、まるで潰されそうなほどの一面青い空であり、私はこう思った。この世界は中身のない空っぽなのだ、と。

作品では、自らが生きている現代に対しての空虚感、圧力について「空」を用い、そのような「空」という存在に潰されながらコミュニケーションと言えるのかわからないコミュニケーションもどきなことを行う私たちは、何者なのだろうか、と演者同士で探りながら創作を行った。そして、作中では「空」を以下の3つの意味を含めて創作した。

”空”

- ①頭上はるかに高く広がる空間
- ②心の状態
- ③中が空なこと

Work process

創作方法の一つであるダンサーとの対話による創作について、以下のようなヒアリングを行った。

①“空”とはなにか

- ・見下ろしている物体
- ・終わりのないもの
- ・私たちを包むもの
- ・届かない場所
- ・何も変わらないもの
- ・私たちが見上げるためのもの

②現代におけるコミュニケーションの特徴とは何か

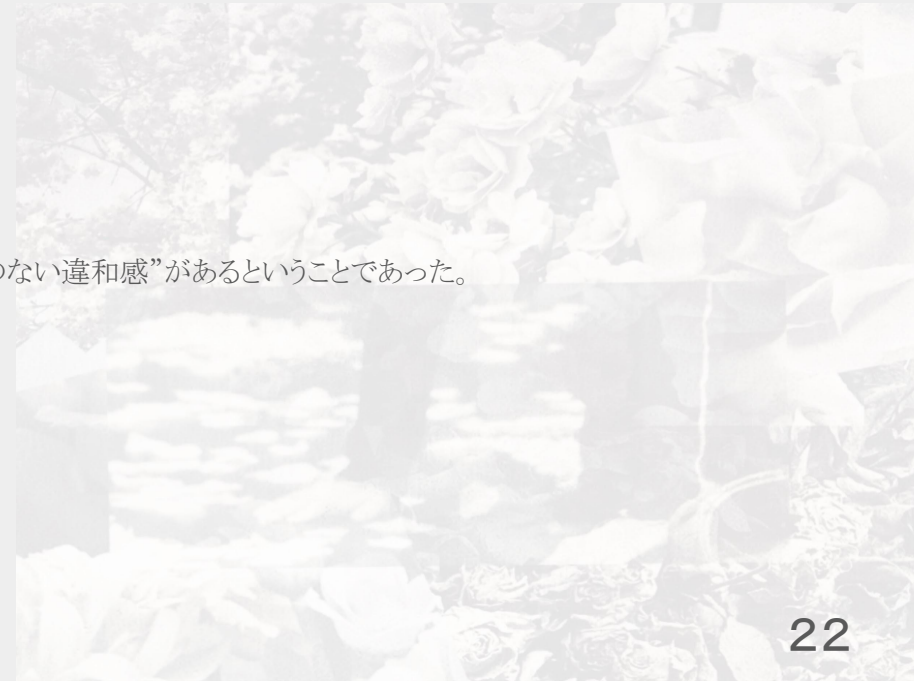
- ・目線を合わせにくい
- ・常に電子機器が関わってくる
- ・温かさを感じにくくなった
- ・生で感じ取ることのできる「感覚」が作用しないため“言葉”にかなりの負担がかかるようになった
- ・都合の良い言葉が浮遊しすぎている
- ・便利にはなったが相手に伝えづらくなった

③それぞれが考える“空”の下で生きる私たちとは

- ・一応生きている感覚
- ・戻ろうにも戻れない所にまで来てしまった
- ・引き返せない、行き場がない
- ・見上げた先と見下ろした先の景色が違いすぎて空を見ると目が眩む
- ・小さい物体にどんどんなっていく
- ・周りは進化していても私たちは何も変わっていない

私を除く6人のダンサーにヒアリングした結果、共通するものとしては現代に対しての“やり場のない違和感”があるということであった。世の中はどんどん効率化し便利になり生きやすくなっているはずなのに。息がとてもしづらい。そこで、ヒアリングの結果を通して2人組を多用した創作を行うことにした。

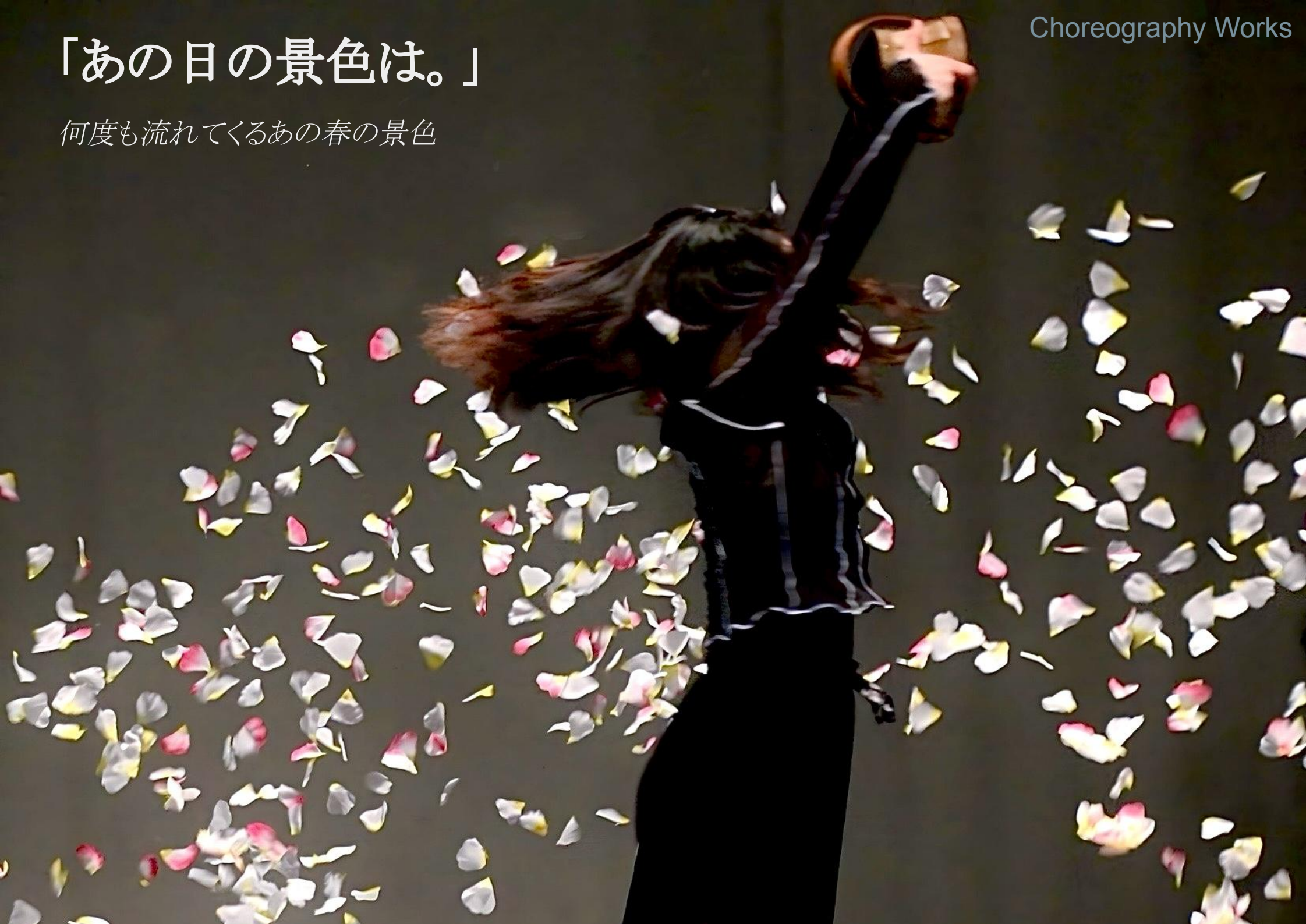
- ・一切相手に触れない
- ・目線が一切合わない
- ・かなり乱暴な触れ合い
- ・コールアンドレスポンスができていない
- ・片方の人間の発信に気づいていない



「あの日の景色は。」

何度も流れてくるあの春の景色

Choreography Works







「あの日の景色は。」

何度も流れてくるあの春の景色

○上演時間

5 分

○上演人数

4人

○使用楽曲

・Maria, the Poet(1913)/Max Richer

Stages

・令和5年度 卒業制作洋舞 中間報告会

令和5年6月16日(金) @日本大学芸術学部北棟 小ホール

[Movie <https://youtu.be/zLsWXm-KCoA>]

Work theme

「何度も流れてくる春の景色」

過去の姿を顧みながらも“生”という時の流れに逆らえない姿を表現した。

ある春の朝、私はドアを開け、瞬きを一度した先に見えたものは、たくさんの花びらが宙を舞っている姿であった。そして私はその景色に自ら足を踏み入れ、雨に打たれるかのように花びらを頭からかぶる。

「この花びらたちはどこに行き着くのだろうか。」

私はまたあの春の日のように、記憶をかぶるのだろう。

Creation theme

「踊り手自身が思い描く(目から見えている)情景と作品を鑑賞している観客側が想像する情景を 近づけるための要因とはなにか」

“身体表現”とは、「情緒的経験を伝えるためのコミュニケーション」であり、そのコミュニケーション内で発信することを伝えるためには、踊り手が思い描く世界と受け取る側である観客が 作品から想像する世界を近づける必要があるのではないかと考えた。

そこで、作品を創作する際に「踊り手の目から作品の情景を見て、その情景を観客に共有 する」ことを重視した。

例えば、“花”が作品の題材だった場合、踊り手が花の動きをするのではなく、踊り手自身から見える“花”に対してどのような反応をするのか、“花”によってどのような心情になり、そこからどのような動きが生まれるのかということを作品に組み込んでいくということである。つまり作品中では、踊り手はみな“人間＝その人自身”として存在するということである。それぞれが自分自身として存在することで、観客もより世界観に入り込みやすいのではないかと考えた。

「春惜しむ」

すくった手の中から散っていった花びら。
でもまたいつか、春の日に会える。







「春惜しむ」

すくった手の中から散っていった花びら。
でもまたいつか、春の日に会える。

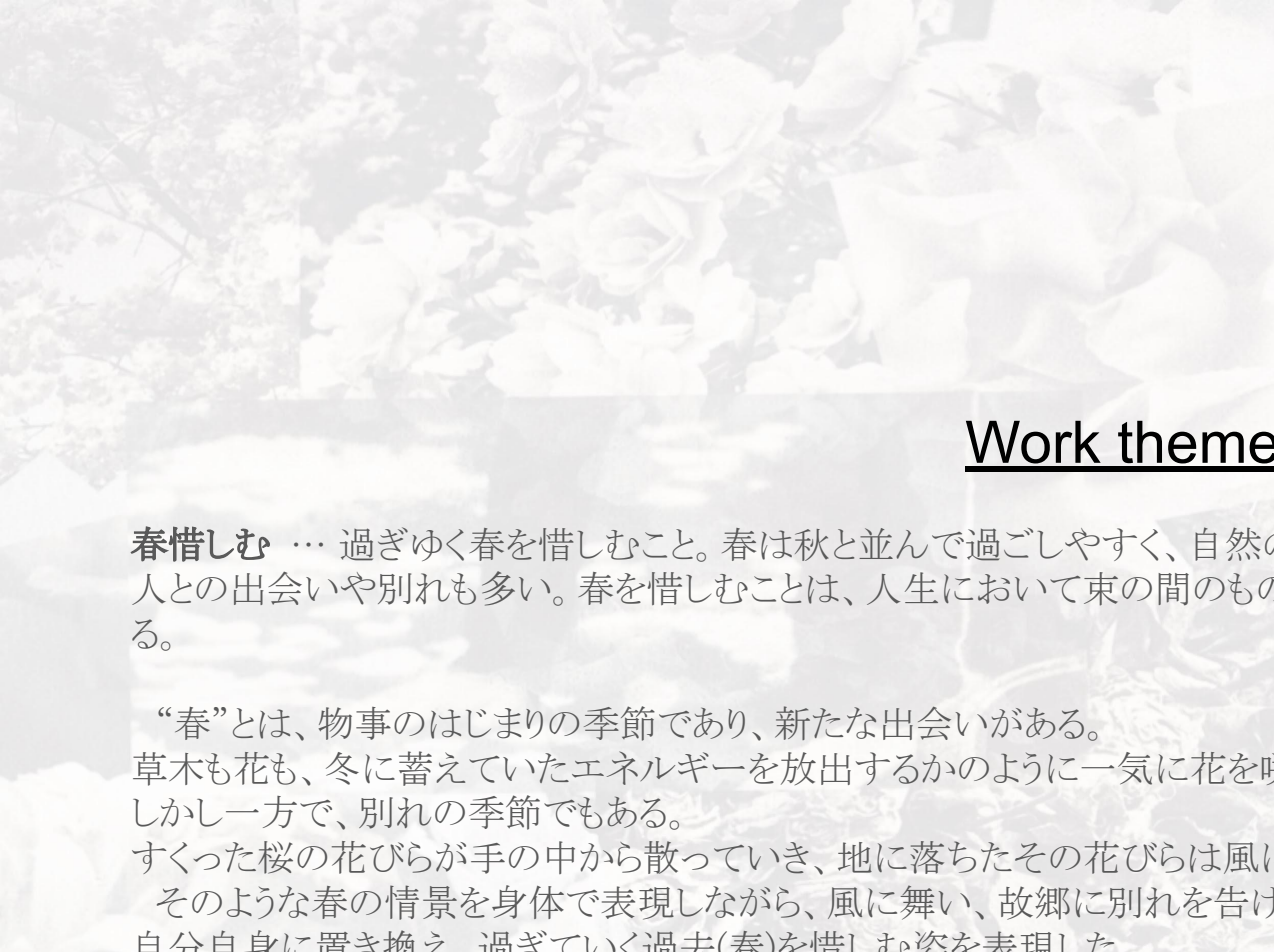
○上演時間
4分

○使用楽曲
・Over/Peter Gregson

○上演人数
1人(自作自演)

Stages

- ・第80回全国舞踊コンクール 現代舞踊一部 入選(予選通過)
- ・第21回バレエ・コンクール IN横浜 コンテンポラリー部門シニア 第1位、特別賞(館内ホール館長賞)
<https://www.j-ballet-kanto.jp/concours/result2023/>
<https://nichigei-engeki.com/洋舞4年生が日本バレエ協会主催コンクールで第1>
- ・第55回埼玉全国舞踊コンクール モダンダンス1部 埼玉県舞踊協会奨励賞
https://www.saitamaken-buyoukyokai.jp/contest/2023/no55_md1.php
- ・令和5年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業 現代舞踊新進芸術家育成 Project 1
現代舞踊協会主催 選抜新人舞踊公演2023 出演
<https://www.gendaibuyou.or.jp/stage/stage-p/s23092000>
- [Movie <https://youtu.be/M5y1DvAUQmM?feature=shared>]
- ・第10回湘南バレエ・コンペティション
コンテンポラリー部門 自由作品シニア部門 第1位、PARTS留学スカラシップ賞
<https://www.s-ballet-c.jp/result/>



Work theme

春惜しむ … 過ぎゆく春を惜しむこと。春は秋と並んで過ごしやすく、自然のすがたも美しい。また物事のはじまりの季節であり、人との出会いや別れも多い。春を惜しむことは、人生において束の間のものである佳き時間や佳き交わりを惜しむ心につながる。

“春”とは、物事のはじまりの季節であり、新たな出会いがある。
草木も花も、冬に蓄えていたエネルギーを放出するかのように一気に花を咲かせていく。
しかし一方で、別れの季節でもある。

すくった桜の花びらが手の中から散っていき、地に落ちたその花びらは風に乗って飛ばされていった。

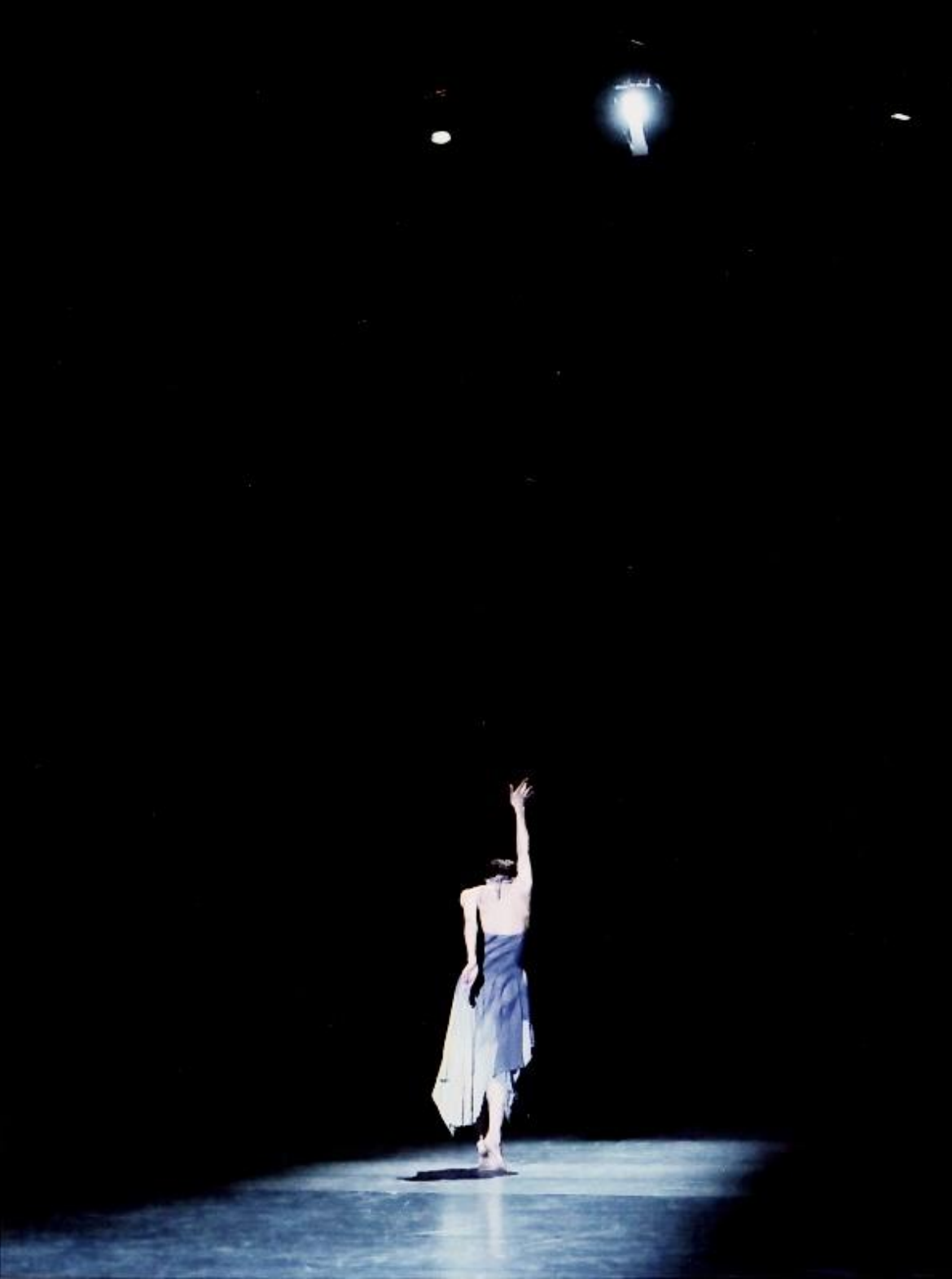
そのような春の情景を身体で表現しながら、風に舞い、故郷に別れを告げ、新たな場所や出会いを求めていく桜の花びらを自分自身に置き換え、過ぎていく過去(春)を惜しむ姿を表現した。

そして、その花びらはいつかきっと春の日にもまた会える。

「月に染まる」

闇夜に手を伸ばし、やがて満ちる。





「月に染まる」

闇夜に手を伸ばし、やがて満ちる。

○上演時間

4分

○使用楽曲

・Quartet No.3 The Way of 1000 and One Comet : Adagio, The Last Black /Ezio Bosso

○上演人数

1人(自作自演)

Stages

・第54回埼玉全国舞踊コンクール モダンダンス1部 埼玉県舞踊協会賞

・令和4年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業 現代舞踊新進芸術家育成 Project 1
現代舞踊協会主催 選抜新人舞踊公演2022 出演

<https://www.gendaibuyou.or.jp/stage/s22090800>

[Movie https://youtu.be/wD9u_6RjDNM]

・第41回あきた全国舞踊祭 モダンダンスコンクール 入選

https://www.akicon.net/00result2/akicon41_2022/00/akicon41-senior.html

Work theme

夜、ふと空を見上げると、一際目立つ存在として「月」がある。
ずっと見つめているとなんだか月に吸い込まれそうになった。

月は自ら発光しないため日中はほとんど姿が見えないが、暗くなると太陽の光によって存在が一気に際立つ。自ら存在する意味を示し、暗闇を照らす「月」という存在に、私はとても惹かれた。

今生きている現代に対して、「私は何者か」と考えると、どことなく虚無感を感じてしまう。

しかし、今自分が置かれた場で自らを染めてくれる光を探し、自己を確立する。

「月」はまるで私になりたいものそのものであると感じた。

そこで、空から降る光に染まっていきながら自らを成していき存在を確立させていく姿を作品で表現していきたいと思い今回創作した。

「今日も私は月の光に染まりながら私を探す」



「Reminiscence -慈雨-」

永遠から過去がこぼれる。





「Reminiscence -慈雨-」

永遠から過去がこぼれる。

○上演時間
4分

○使用楽曲
・Reminiscence/オーラヴル・アルナルズ、アリス＝紗良・オット

○上演人数
1人(自作自演)

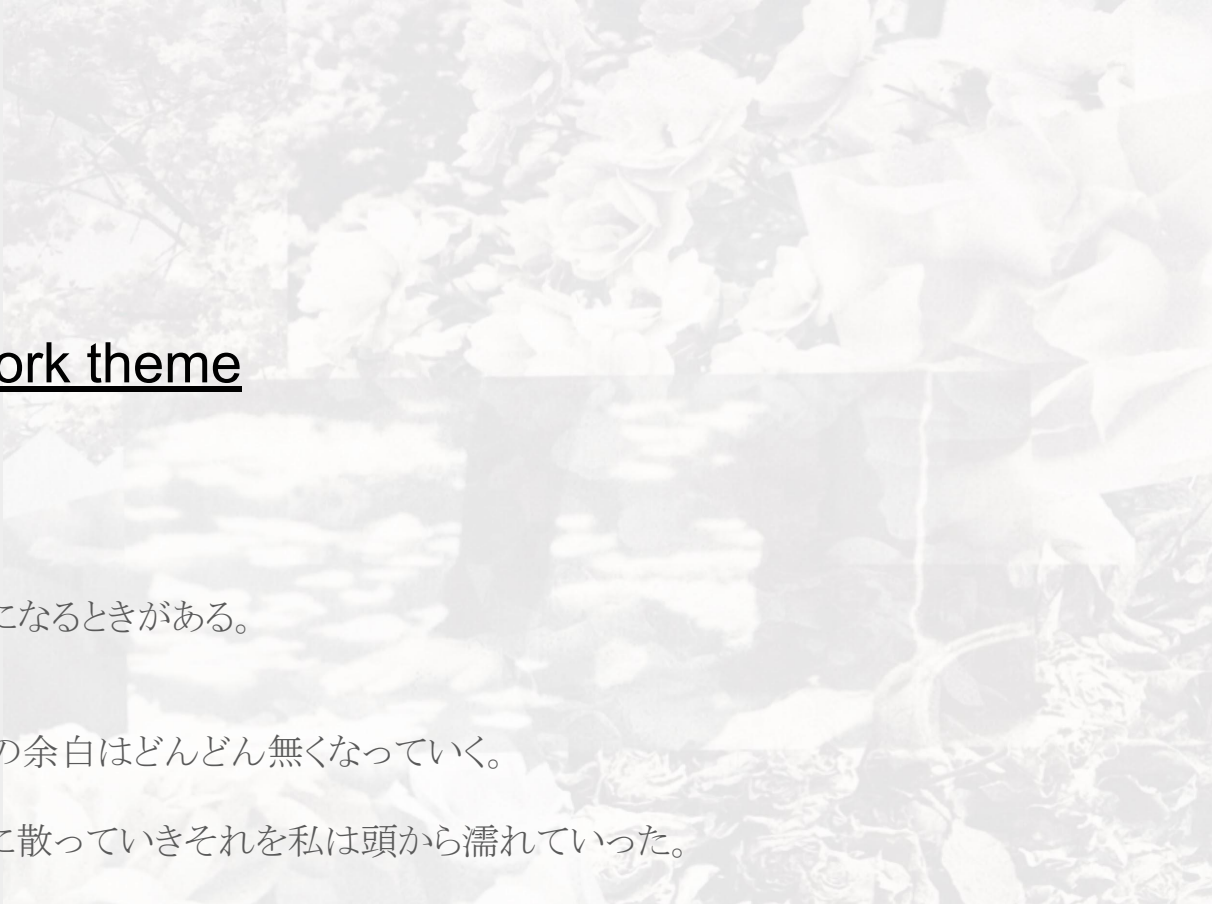
Stages

・第39回あきた全国舞踊祭 モダンダンスコンクール 入選
https://www.akicon.net/00result/akicon39_2020/00/akicon39-senior.html

・第19回バレエ・コンクール IN横浜 コンテンポラリー部門シニア 第3位
https://kk-video.co.jp/video/ballet_yokohama-19_contemporary-sr_03/

・令和3年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業 現代舞踊新進芸術家育成 Project 1
現代舞踊協会主催 選抜新人舞踊公演2021 出演
<https://www.gendaibuyou.or.jp/stage/stage-p/s21100200>

[Movie <https://youtu.be/uK0uvVXpHA0>]



Work theme

Reminiscence … 回想、思い出

慈雨 … 万物を潤し育てる雨。恵みの雨。

雨の日というのは、何故か昔を思い出して懐かしむ気持ちになるときがある。

雨の音、香り、景色…。

すべて私が生まれた時から変わっていない。

しかし、歳を重ねていくにつれ、雨で懐かしむような気持ちの余白はどんどん無くなっていく。

それどころか雨というものが鬱陶しいものになっていく。

そしていつか気持ちの余白がなくなっていき、すべて粉々に散っていきそれを私は頭から濡れていった。

「まるで慈雨に打たれているように。」

人間というのは何かが爆発した瞬間、我に返り過去の姿を顧みることがあり、私自身も何度も経験したことがある。

回想する、思い出す、ということは前進することよりも“生きる”ということだ。

「慈雨への遭遇」を表現していく。

「妖艶の花」

この夜が明ければ。





「妖艶の花」

この夜が明ければ。

○上演時間
4分

○使用楽曲
・Fonograaf/Machinefabriek
・Journey Sequence/Max Richer

○上演人数
1人(自作自演)

Stages

・全国新人舞踊公演(通算134回) DANCE PLAN 2022 出演
<https://www.gendaibuyou.or.jp/stage/stage-p/s22030400>

[Movie <https://youtu.be/Ppgor2J-PzA>]

・第40回あきた全国舞踊祭 モダンダンスコンクール 入選
https://www.akicon.net/00result/akicon40_2021/00/akicon40-senior.html

Work theme

物音ひとつない静寂の森
青白く光る月の下
あなたは真剣を片手に
静かに佇む

微かにそよぐ風

白刃は風に吹かれ
ゆっくりと円をえがく

息を詰め見守る獣たちの
小さな吐息
剣尖は方向を変える

蛾が飛び立つ気配
銀色に切り裂く
鱗粉の舞

静かな乱舞の軌道の跡は
無空に描かれた
月下美人

匂い立つ芳香に
世界は
酔いしれる

たったひと夜の
幻の花

(「月下美人」 | 美加りん)

妖艶の花＝「月下美人」

たった一晩しか咲かない花ではあるが、その一晩は月下美人の生命そのものである。
そして生きるために送粉者であるコウモリを誘うために真っ白で大きな花を咲かせ、強い香りを放つ。
そして、生育期間の長さに対して開花期間があまりに短い。まさに“生”である。
その時を待ち続け、手を伸ばし、月の光の下で生きる。

「ただ一度だけ会いたくて。」

